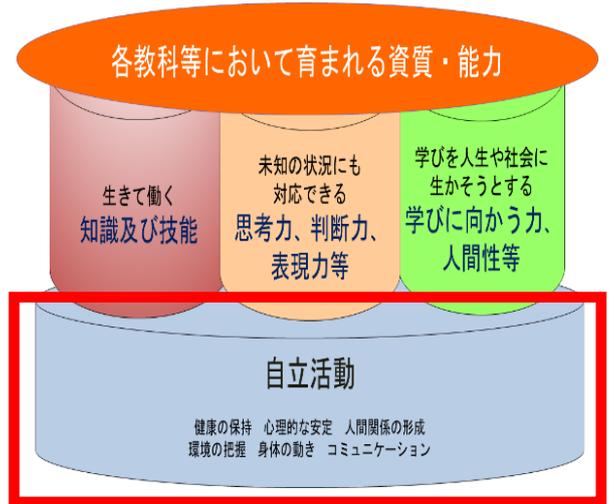




障がいによって発達の基盤(学びの土台)にばらつきが生じ、各教科等において育まれる資質・能力がうまく積み上がらないことがあります。

自立活動の学習では、発達の基盤(学びの土台)を整える学習を行います。右の図のように自立活動が各教科等において育まれる資質・能力を支える役割を担っているイメージです。



自立活動の指導の特色について

自立活動の指導には、自立活動の時間で行うものと学校の教育全体を通じて行うものがあります。



自立活動の時間(要の時間)



学校の教育活動全体



目標を達成する上で効果的である場合は、集団で指導することも考えられます。



個別指導



集団指導

個別の指導計画の作成について

個別の指導計画作成の流れ



子供の実態は一人一人違います。だからこそ、一人一人に合った目標や内容を作成し、計画的に指導していくことが大切になります。



これを具体化したものが

個別の指導計画

ポイント

複数の視点で作成することで、多面的に理解できます。

ポイント

授業を進めながら修正していくことで実態把握が深まります。



評価は一人一人の指導目標に照らして行います。※各教科のように3観点で評価はしません。

例) 「すごろくゲームをしよう」

I つかむ (課題を把握し、見通しをもつ)

児童生徒自らが目標を知り、見通しをもつ

今日も「すごろくゲーム」をするよ。
Aさんはどのような目標だったか覚えているかな？
Bさんも覚えているかな？



僕は「順番を守って活動すること」です。



私は「自分で話すこと」です。

そうだね。しっかり覚えているね。
少しずつ、できることを増やしていこうね。

教師の関わり

この教師は、「なぜ、この授業を行うのか」、「目標は何か」、「どのような姿になっていきたいか」等を子供と一緒に確認しています (一人一人目標は異なります)。この確認が改めて自分を知り、自己理解が深まる機会となるからです。このことにより、目標や達成後の変容を知る (明確になる) ことで見通しがもて、より主体的に取り組めるようになっていきます。

II 深める (追究し、解決する)

つまずきに寄り添い、見守る

Bさんの苦手な発表表にあたったわ。どうするだろう。

どうしよう。



教師の関わり

この教師は、児童生徒が興味・関心を示しそんな教材を使用することにより、主体的に活動に取り組みやすくさせています。

また、活動中は自分の目標と向き合う場面や時間 (教師の仕掛け) を設定していくようにしています。

ここで大切になるのが、児童生徒が自分で考え行動できるよう、指導・支援する側は「待つ」意識をもつことです。もし、自分で考えて行動した姿が見られたら、称賛しながら「何が (どこが) よかったか」を振り返らせていきましょう。



教師から声を掛けて、一緒に考える。



子供の依頼を受けて、一緒に考える。



手だてを準備し、それをもとに自分で考える。

関わり方 (支援方法) の例 ※児童生徒の実態により変化

III まとめる・振り返る

自己の変容に気付かせていく

今日は自分の目標を達成できたかな？

僕は、順番を抜かしちゃった。

私は、緊張したけど自分から伝えられました。

では、Aさんは何で難しかったと思う？
逆に Bさんは何でできたのだろう？

僕は、やりたい気持ちが我慢できなかった。

私は、間違ってもいいからやってみようと思いました。

二人とも自分のことをよく振り返れていたね。
難しかったところはまた次回、できたところは他の場面でも試してみようね。

教師の関わり

この教師は、個人の目標に対して「どうだったか」、子供の自己評価を取り入れながら振り返らせています。また、この振り返りによって得られた学びが別の場面に般化できるよう、他の教員と連携しながら意図的に場面を設定して (仕掛けて) いくようにしていきます。



